

全国の木鸛

——伝播と変容について——

柳 智子

一 はじめに

新春一月七日の午後七時頃、太宰府天満宮絵馬堂前では手に手に木鸛を持った参詣者で賑わいをみせる。神職の合図により、境内の灯りが消され、暗闇の中、「替えましょ、替えましょ」の掛け声とともに参詣者たちは木鸛を次々に交換していく。木鸛を交換することにより、参詣者は一年間知らず知らずのうちにいつてしまった嘘を天神さまの誠こころに替えていただくことができると思われている。鸛替神事は、太宰府天満宮だけで行われている神事ではなく、全国の天満宮や天満宮に縁のある神社などでも行われている。鸛替神事に欠かせない祭具である木鸛も、江戸時代初期の万治年中（一六五八～一六六二）の木鸛が『天満宮御一代記・絵本菅原実記』^①や『百人一首一夕話』^②の中で紹介され、四〇〇年近い歴史があり、太宰府天満宮がその発祥とされている。筆者は太宰府の木鸛を取り上げた展示を企画したことをきっかけに、資料の収集と研究を始め、その成果を「太宰府の木鸛」^③で発表した。論文を発表したことを契機として、様々な関係の方々から太宰府の木鸛に関する情報だけでなく、全国の鸛替神事や木鸛の情報をお教えたいただく機会が増加し、「木鸛」とひとことで言い表せないほど全国には多種多様な木鸛が存在することが分かった。全国の鸛

替神事と木鸛については、筆者が確認できた天満宮や神社などについてのみ、表1の神社一覧表に記載している。表1を見ると、全国で催行される鸛替神事は祭日や祭名などが異なり、木鸛は多種多様な形態のものが現存している。太宰府天満宮を発祥とし、各地に伝播した鸛替神事と木鸛は、なぜこのように多様な様相へと変貌を遂げたのか。

この論文では、神事の祭具である木鸛に注目し、太宰府の木鸛と全国の木鸛に見られる特徴とを比較し、木鸛が全国に広がる過程で多様化していった要因を探っていく。

二 太宰府と全国の木鸛分類

鸛替神事や木鸛は太宰府天満宮が発祥だと伝えられている。「太宰府の木鸛」^④で太宰府の木鸛に関する資料を研究した結果、太宰府で語り継がれてきた伝承だけでなく、文献や絵画資料からも、太宰府天満宮が鸛替神事や木鸛が発祥だというのは確からしいのだろうと考えてきた。その後、自らも木鸛を製作する者として、絵画資料に描かれている木鸛をひとつずつ復刻していく作業をコツコツと続けてきた。^⑤絵画という二次元資料を、原木を削り、三次元で実体化する作業を通じて、出来上がった木鸛の形や色が、江戸時代や明治、大正など出会う

表 1 神社一覧表

	神社名	所在地	祭日（神事名）
東北			
△	北野神社	宮城県石巻市長面字大入山18	1月25日（初天神祭・うそ替神事）
	高畑天満宮	福島県福島市飯坂町湯野字高畑2	1月12日～16日（うそかえ祭）、4月27日（春季大祭）
関東			
	千葉天神	千葉県千葉市中央区院内1-16-1	1月25日～2月3日（うそ替え神事）
	亀戸天神社	東京都江東区亀戸3-6-1	1月24・25日（うそ替え神事）
	湯島天満宮（湯島天神）	東京都文京区湯島3-30-1	1月25日（初天神祭・鷺替神事）
	五條天神	東京都台東区上野公園4-17	1月1日～3日、25日（鷺替えの神事）
	谷保天満宮	東京都国立市谷保5209	11月3日（庭燎火・うそ替え神事）
◎	町田天満宮	東京都町田市原町田1-21-5	
	新井天神 北野神社	東京都中野区新井4-14-3	1月1日～3日、25日
	平河天満宮	東京都千代田区平河町1-7-5	
◎	岡村天満宮	神奈川県横浜市磯子区岡村2-13-11	1月25日（初天神祭）
▲	朝日森天満宮	栃木県佐野市天神町807	1月25日（初天神祭）
◎	見付天神 矢奈比賣神社	静岡県磐田市見付1114-2	
東海			
▲	桜天神社	愛知県名古屋市中区錦2-4-6	1月25日（うそ替え）
◎	七尾天神社	愛知県名古屋市中区白壁2-28-19	
	名古屋天神 上野天満宮	愛知県名古屋市中千種区赤坂町4-89	1月15・25日（うそ替え神事）
	山田天満宮	愛知県名古屋市中区山田町3-25	1月25日（鷺替神事）
×	石松天神社	愛知県名古屋市緑区	
×	若宮八幡社 火防天神社	愛知県名古屋市中区	
×	徳川天満宮	愛知県	詳細不明（玩具帖32号）
◎	岩津天満宮	愛知県岡崎市岩津町字東山53	以前は1月25日
	岡崎天満宮	愛知県岡崎市中町北野1	1月25日（鷺替神事）
×	於保多神社	富山県富山市於保多町1-32	5月25日（鷺替え）
△	天神 深志神社	長野県松本市深志3-7-43	
関西			
×	四日市諏訪神社	三重県四日市市諏訪栄町22-38	中止（玩具帖32号）
△	北野天満宮	京都府京都市上京区馬喰町	詳細不明（巨泉玩具帖3巻10号、玩具帖1・6・48号）
	大阪天満宮	大阪府大阪市北区天神橋2-1-8	1月24・25日（うそ替え神事）
×	安居天満宮	大阪府大阪市逢坂1-3-24	昭和初期に中止（巨泉玩具帖3号10号・5巻4号）
	道明寺天満宮	大阪府藤井寺市道明寺1-16-40	1月25日（初天神・うそかえ祭）
◎	湊天神 船待神社	大阪府堺市西湊町1-2-18	
△	摂津天満宮	大阪府堺市八田寺町524	
	菅原神社	奈良県奈良市菅原町518	6月25日（誕生祭・鷺替神事）
◎	網敷天満宮	兵庫県神戸市須磨区天神町2-1-11	
中国・四国			
	滝宮天満宮	香川県綾歌郡綾川町滝宮1321-2	4月24日（鷺かえ神事）
	潮江天満宮	高知県高知市天神町19-20	1月25日（初天神祭・うそ替神事）
×	八坂神社	山口県山口市大字上堅小路100	
×	防府天満宮	山口県防府市松崎町14-1	
九州			
	太宰府天満宮	福岡県太宰府市宰府4-7-1	1月7日（鷺替神事）
	水鏡天満宮	福岡県福岡市中央区天神1-15-4	1月7日（鷺替神事）
△	鏡天満宮	福岡県福岡市博多区下川端町3-1	
	住吉神社	福岡県福岡市博多区住吉3-1-51	1月7日（鷺替神事）
	上町天満宮	福岡県福岡市西区今宿3	1月7日（鷺替神事）
	老松神社	福岡県糸島市前原中央1-4-14	1月7日（鷺替神事）
△	松原天神社	福岡県糸島市志摩芥屋	
	深江神社	福岡県糸島市二丈深江853	1月15日前後の日曜日（追儺祭・うそかえ行事）
△	瀬崎天神宮	福岡県糸島市二丈田中	
	川上六所神社	福岡県糸島市大字本	3月初午の日（初午祭・鷺替え神事）
×	菅原神社 徳若天満宮	福岡県中間市徳若	7月24日（鷺替神事）現在は中止
×	梅安天満宮	福岡県中間市中央1-42	7月24日（鷺替神事）現在は中止
×	波折神社	福岡県福津市津屋崎4-33-1	大みそか 現在は中止
×	三春天満宮	福岡県うきは市浮羽町三春2587	4月の第1日曜日 現在は中止
×	若宮八幡宮	福岡県うきは市吉井町若宮366-1	4月3日（はと替）現在は中止
×	北野天満宮	福岡県久留米市北野町中3267	2月25日（鷺替え祭）
×	小川天満宮	福岡県久留米市田主丸町船越	
×	草野天満宮	福岡県久留米市草野町草野	
×	水田天満宮	福岡県筑後市水田62-1	
×	駛馬天満宮	福岡県大牟田市宮原町1-191	3月24・25日（春季鷺替大祭）、9月24・25日（秋季鷺替大祭）
×	船津天満宮	福岡県大牟田市南船津町3-8-2	
	高木神社	福岡県東峰村	7月最終日曜日（高木神社夏祭り・鷺替え神事）
×	唐津天満宮	佐賀県唐津市十人町148	
	角埋神社 角埋不動尊	大分県玖珠郡玖珠町森	4月第1日曜日（ウソ替え）
×	北山田	大分県玖珠郡玖珠町大字戸畑	
×	豊後森	大分県玖珠郡玖珠町大字帆足	
	羽野天満宮	大分県日田市三和	2月7日（ウソ替え）
	高瀬天満宮	大分県日田市高瀬本町	
	老松天満宮	大分県日田市	
	溝口天満宮	大分県日田市小野殿町	殿町壮年会が木鷺製作
△	大原八幡宮	大分県日田市田島2-184	
	坂井天満宮	大分県日田市坂井町	
×	松森神社	長崎県長崎市上西山町4-3	
	手取天満宮	熊本県熊本市上通町5-34	4月25日（春祭・うそかえ行事）、10月25日（秋祭・うそかえ行事）
	登立天満宮	熊本県上天草市大矢野町登立	7月24・25日（夏まつり・鷺替）

×…廃絶 △…詳細不明 ◎…通年授与のみ ▲…土製鷺 ※掲載以外にも神事を催行あるいは廃絶している可能性があることを記しておく。

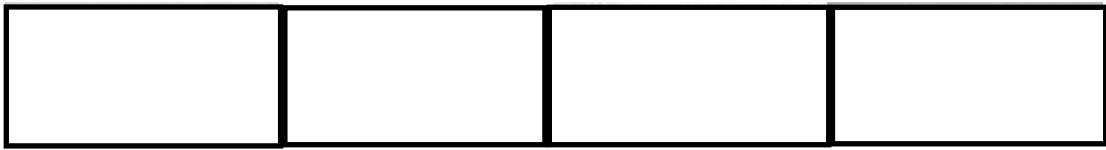
(彩色)



※青色は緑色として分類している。

赤黒緑金

(目の形状)



丸目

逆三角目 (小)

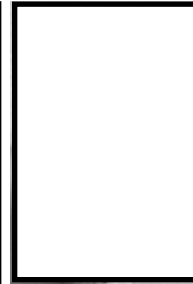
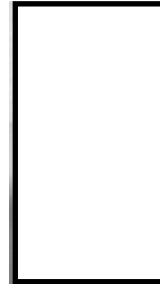
逆三角目 (大)

逆三角目 (金縁)

(口の表現)



(胸の彩色位置)

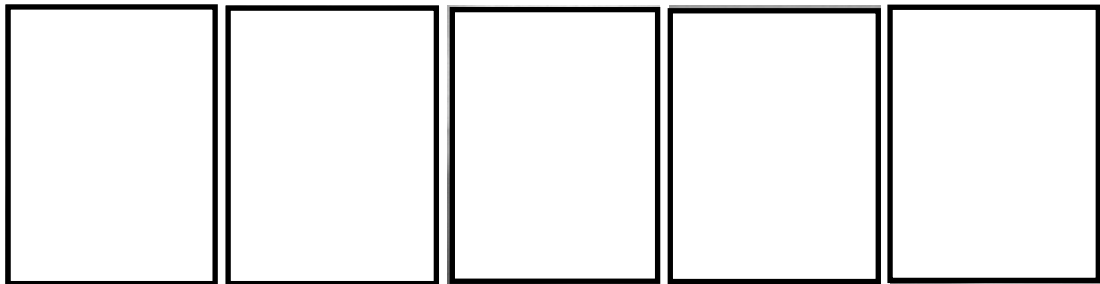


上

中

下

(羽の形状)



描画・線刻

縦直列

放射状

カール

カーブ

図1 属性観察図

このない木鸞製作者たちが生きた時代の色や雰囲気を与えているような感覚を憶えた。その作業は後に全国の木鸞を目にするにあたり、大いに役立つことになった。全国各地の多様な木鸞を目にするようになった時、それらすべてが復刻してきた木鸞にどこか似ていることに気付いた。そこで、全国の木鸞は、すべて太宰府の木鸞の歴史の変遷過程のどこかで伝播し、受容されていくなかで、変容した結果ではないかという仮説をたてた。そこで、太宰府の歴史の変遷上での木鸞（以後、太宰府の木鸞）と現存する全国の木鸞（以後、全国の木鸞）とを同じ属性から特性を抽出し、分類を行った（図1）。同じ属性で括れるグループは、同じ形態的特徴を持つタイプとして、分類した。

太宰府の木鸞分類 太宰府の木鸞については、筆者の「太宰府の木鸞」⁽⁶⁾で、江戸時代から現在までの木鸞を紹介し、時代ごとの形態や製作工程、素材も含め、個々の木鸞を細かく観察していたが、今回は、太宰府と全国の木鸞とを比較するため、観察する箇所（属性）を絞り込んで分類を試み、要素の共通からA、A'、B、B'、Cの五つのタイプに分類した（表2参照）。

Aは、彩色は赤黒で、細長い形に、目は丸目で、羽は描画と縦直列の削り出しで表現する。『天満宮御一代記・絵本菅原実記』に「宇曾替之守之図」がある。天保四年（一八三三）の『百人一首一夕話』（図2-1）には前述の「宇曾替之守之図」に酷似した絵図があり、「楳の如き木を以て造る」「この鸞替は万治年中の物にして或家に秘して持ちたると、画史の写すものなり。古雅真に見るべし。」と注釈が入り、万治年中（一六五八〜六二）に作られた木鸞だとされている。⁽⁷⁾この他に、文化二年（一八〇五）に齋藤秋圃が描いた『わすれくさ』（図2-2）の木鸞がある。

A'は嘉永六年（一八五三）に齋藤秋圃が描いた『筑前太宰府鸞換追難之図』（図2-13）に登場する。「太宰府の木鸞」⁽⁸⁾では、Aと同じ特徴だと考えていた。しかし、直接絵図を観る機会があり、丸目の横に金箔の装飾が入り、描画された羽の上に青色で彩色が施され、カールの羽の先端に赤の彩色があることが確認され、Aとは違う特徴を持つことが分かった。⁽⁹⁾Bに分類する明治以降は、羽のカールに赤緑（青）などの彩色が施されるようになり、AはAとBの中間的要素を持つ存在であると言える。

Bは彩色が赤黒緑（青）で目の形状が丸目もしくは小さな逆三角目で、羽が描画と不揃いなカールの削りで表現されている。彩色や模様が多種多様で、統一性がないようにも見えるが、口を表現せず、羽を描画する特徴が一致している。明治から昭和初期に製作されていた太宰府の木鸞は、大阪の玩具絵師で郷土玩具蒐集家の川崎巨泉『巨泉玩具帖』と『玩具帖』（図2-14〜6）に多く描かれている。

B'は占部家が製作していた木鸞（図2-17）で丸目で、赤黒緑で彩色され、羽の形状は不揃いなカールのみで描画はなくなっている。足の表現が短い鋤先状で、口を描画により書きこむようになる。鎌や鉞などの農機具を改良した道具で製作を行っており、占部勇氏は木鸞製作を専業としていた。

Cは大きな逆三角目と繊細に整えられた羽のカール、赤黒緑の彩色などに特徴がある。昭和三十三年（一九五八）にベルギーのブリュッセル万国博覧会に、「郷土玩具、紙製品その他」のグループの一つとして出展したことで生み出された木鸞である。ブリュッセル万国博覧会に出品したのは高田保氏で、太宰府天満宮神職御田良清氏とともに、このデザインを考案している。万博以後、高田家（図2-18）と岡藤

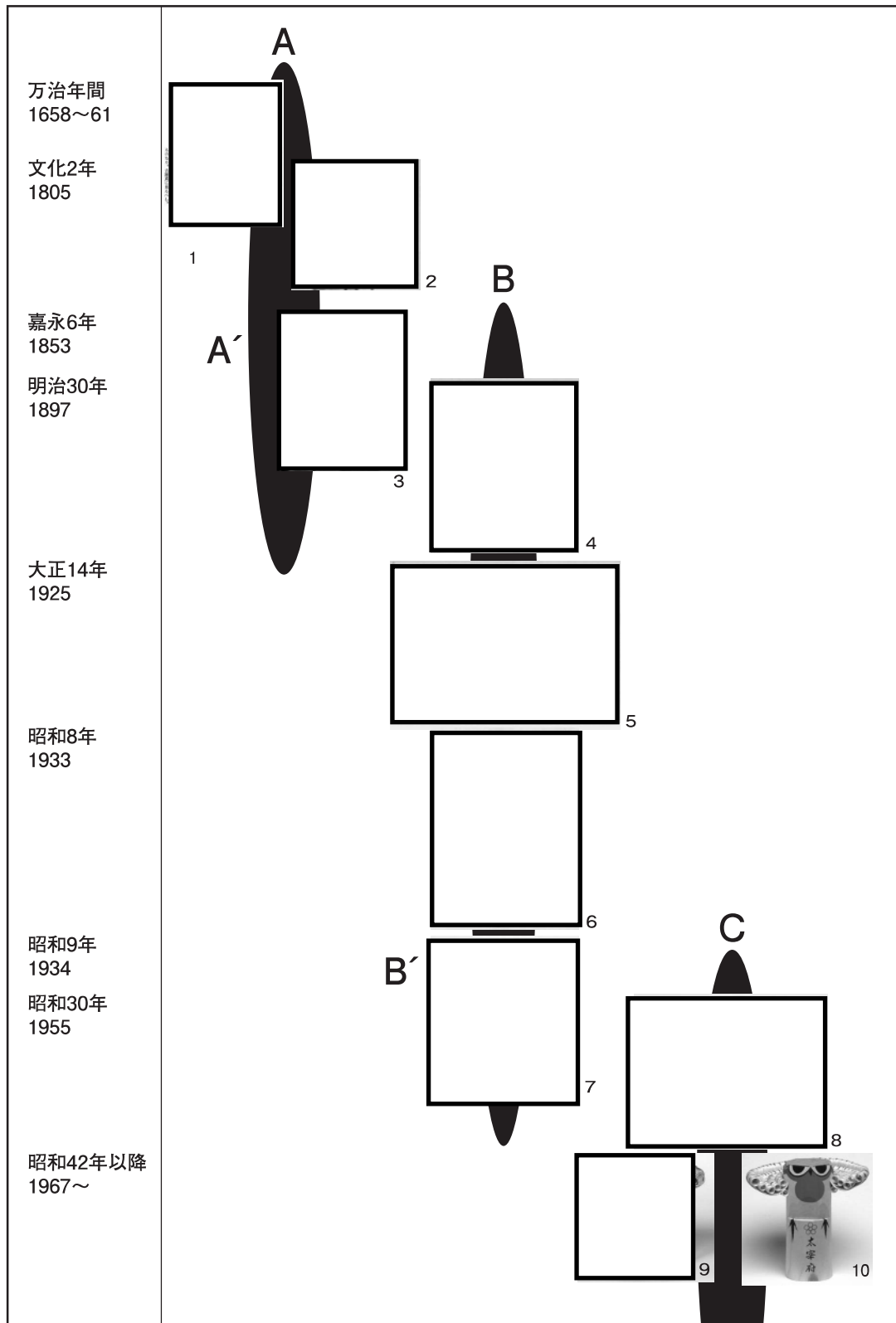


図2 太宰府の木鸞変遷図

表2 太宰府の木鸕属性表

参考文献	年代	タイプ	彩色			目の形状		口の表現		胸の彩色位置			羽の形状		頭頂		備考		
			赤黒	赤黒緑金	赤黒緑	丸目	逆三角目	口の切込	描画	上	中	下	描画	縦直列	カール	彩色		金箔・金紙	
1	伝・万治年中	A	○			小		○		○	○		○		黒		図2-1		
2	文化2年 (1805)		○					○		○			○		黒		図2-2		
3	嘉永6年 (1853)	A'		○		○		○		○	○		○		黒		図2-3		
4	明治30年 (1897)				○		小			○		○		○		黒	○	図2-4	
5	大正14年 (1925)	B	○							○				○			○	図2-5	
																		○	図2-5
																			○
6	大正15年 (1926)	B								○				○				モノクロ写真	
7	昭和8年 (1933)					小				○			○		黒	○	○	図2-6	
																黒	○	○	図2-6
8	昭和9年 (1934) 以前	B					小		○				○					モノクロ写真	
9	昭和9年 (1934)																		
					○	○				○						黒	△	図2-7	
10	昭和11年 (1936)	B			○	点						○		○			○	張り子	
11	昭和12年 (1937)				○	小				○			○			黒	○	○	
					○	小					○			○		黒	○	○	
12	昭和20年 (1945)	B'			○		小		○					○		黒	△		
13	昭和34年 (1959)				○	○				○				○		黒	△		
14	昭和34年 (1959)				○	○				○				○		黒	△		
15	昭和30年 (1955)	C			○		大		○	○				○		黒	△	図2-8	
16	昭和34年 (1959)						大			○						黒	△		
17	昭和44年 (1969)				○		大				○						○		
18	昭和50年 (1975)				○		大		○		○						○		
19	平成以降	C			○		大		○	○							○	図2-9	
20	平成10年以降				○		大		○	○	○						○	図2-10	

参考文献 1尾崎雅嘉『百人一首一タ話(上)』(岩波書店) 2齋藤秋圃挿絵『わすれくさ』福岡大学図書館蔵 3齋藤秋圃『筑前太宰府惣換追難之図』福岡市博物館蔵 4川崎巨泉『巨泉玩具帖』六巻七号三 大阪府立中之島図書館蔵 5川崎巨泉『巨泉玩具帖』四巻五号二七 大阪府立中之島図書館蔵 6川崎巨泉『玩具帖』七号二四 大阪府中之島図書館蔵 7川崎巨泉『玩具帖』一七号三 大阪府立中之島図書館蔵 8武井武雄『日本郷土玩』金沢堂 9・12-18九州国立博物館蔵 10川崎巨泉『玩具帖』三〇号九 大阪府立中之島図書館蔵 11川崎巨泉『玩具帖』三四号一七 大阪府立中之島図書館蔵 19木村雷馬(太宰府天満宮元神職) 作 個人蔵 20青柳健夫(太宰府木うそ保存会会長) 作 個人蔵

家、太宰府天満宮神職の木村當馬氏(図2-19)が製作を続けていた。平成始め頃、高田家と岡藤家が次々に廃業し、現在は太宰府木うそ保存会(図2-10)と太宰府天満宮神職が木鸛製作技術の伝承に寄与している。

ここまで、太宰府の木鸛を属性要素の共通性から五つのタイプに分類し、それぞれのタイプの属性特徴と典型例を紹介してきた。典型例から導き出される年代から分類したタイプは、 $A \rightarrow A' \rightarrow B \rightarrow B' \rightarrow C$ と、時間軸上での推移と一致する結果となった(図2・表2)。このことから、今回観察した箇所(属性)は太宰府の木鸛の歴史の変遷を分類する上で、有効であったと結論付けられる。

全国の木鸛分類 全国の木鸛は、現存する木鸛のみに絞り、太宰府の木鸛分類と同様の属性要素を観察をする。この方法により、太宰府の木鸛の歴史の変遷過程のどこに、全国の木鸛が分類されるのか、検証を試み、 $A-1-3$ 、 $B-1-2$ 、 C の6つのタイプに分類した(表3)。

$A-1$ は、彩色は赤黒緑金で、目は丸目、口を切込により表現する。胸の彩色位置は上位で楕円もしくはやや円形に描く。羽は縦直列に削り出す。頭頂部分は黒色に彩色するのみで、新井天神(図3)、亀戸天神社(図4)、潮江天満宮などが該当する。太宰府の木鸛分類 A と A' に類似する特徴を持つ。太宰府の木鸛分類で A に該当する文化二年(一八〇五)『わすれくさ』(図2-12)の木鸛と A' に該当する嘉永六年(一八五三)『筑前太宰府鸛換追儼之図』(図2-13)の木鸛は、約五〇年と製作年代に開きがあり、齋藤秋圃がその二つを描き分けていることから、 A と A' との木鸛の間で形態変化が起きたことが分かっている。 A と A' の違いは、彩色が赤黒から赤黒緑金に、羽の形状が縦直列からカールに変化していることである。 $A-1$ は羽の形状が縦直

○全国の木鸛 $A-1$

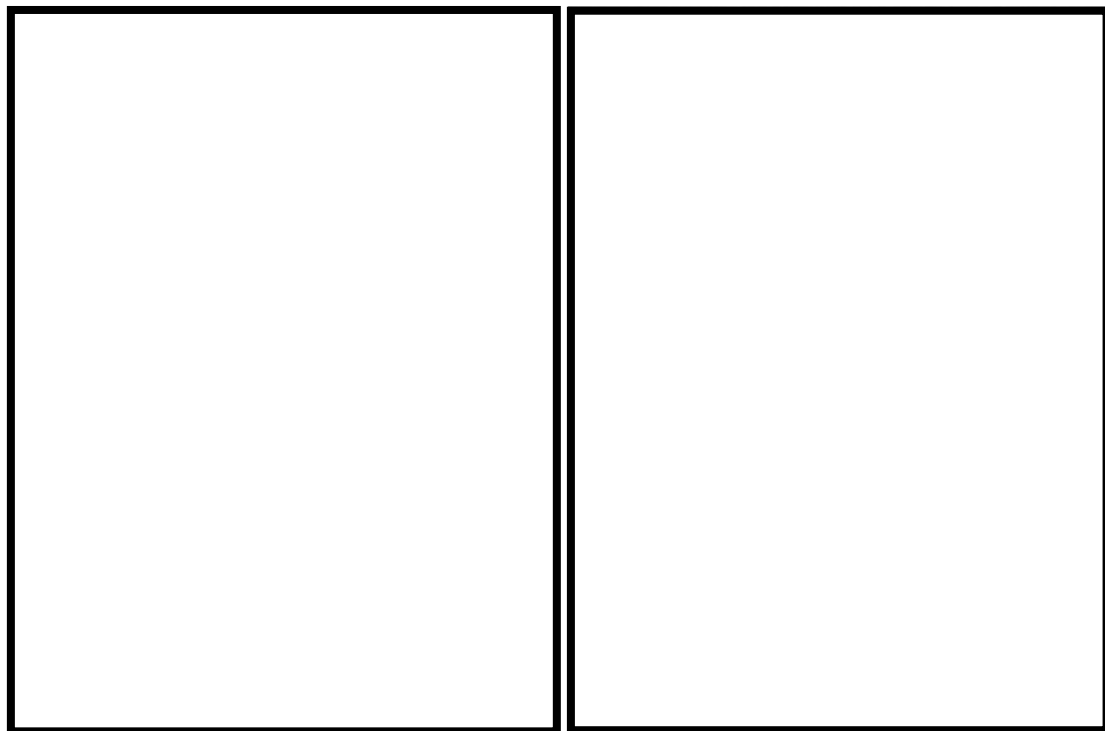


図4 亀戸天神社(東京都)

図3 新井天神(東京都)

列で太宰府の木鷲Aと類似し、彩色では赤黒緑金の太宰府の木鷲Aの特徴を有している。太宰府の木鷲分類AとA'は江戸時代に太宰府で製作されていた最も古い形態の木鷲で、その属性が類似するA-1の木鷲は関東地域に分布が偏っている。それは江戸時代後期に鷲替神事と木鷲が当時の大都市江戸に伝えられたことに由来する。天保十一年（一八四〇）の山崎美成が書いた『三養雑記』に、「近ごろ、文政二年、大阪の天満天神にて、宰府にならひて、この神事をはじめて執行せしとき、大阪にてはやり唄に、「こころづくしの神さんが、うそとまことに替えさんす、ほんにうそかへ、おおうれし」という小唄をうたひしに、この他もてはせしよりきけり、さて江戸にても、その次の年より本庄亀井戸天満宮にても、毎年正月二十五日、鷲替あり。」と記されており、文政三年（一八二〇）から亀戸天満宮で一月二十五日に鷲替神事をするようになった。文政三年は、太宰府の木鷲がAとA'の間、つまり文化二年（一八〇五）と嘉永六年（一八五三）の形態変化があった期間にあたる。この時期に亀戸天満宮に太宰府から鷲替神事とともに木鷲が伝わったため、太宰府の木鷲分類AとA'両方の特徴を持つA-1が存在すると考えられる。また、A-1が関東地域に多く見られるのは、文政三年に江戸本庄の亀戸天満宮に木鷲が伝播した後、ここを核としてさらに鷲替神事と木鷲が周辺地域に伝播・受容されていたことが要因だと推定される。

A-1-2は彩色は赤黒緑、目は丸目で口を切込や彩色により表現する。胸の彩色位置は、上位もしくは中位に楕円もしくは円形に描く。羽は縦直列や放射状、カーブで削り出す。頭頂部分は黒色彩色か、金紙を貼りつける。高畑天満宮1（図5）、谷保天満宮（図6）、千葉天神、上野天満宮、七尾天神社（図7）、大阪天満宮などが該当する。A-1

○全国の木鷲 A-2

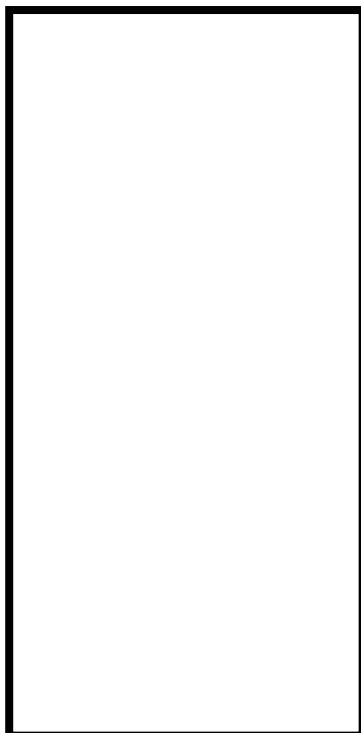


図7 七尾天神社（愛知県）

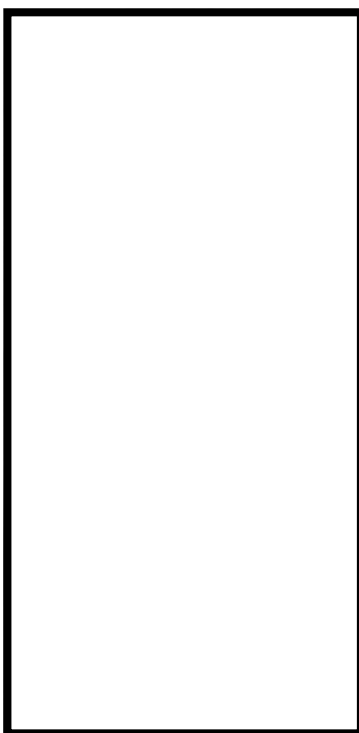


図6 谷保天満宮（東京都）

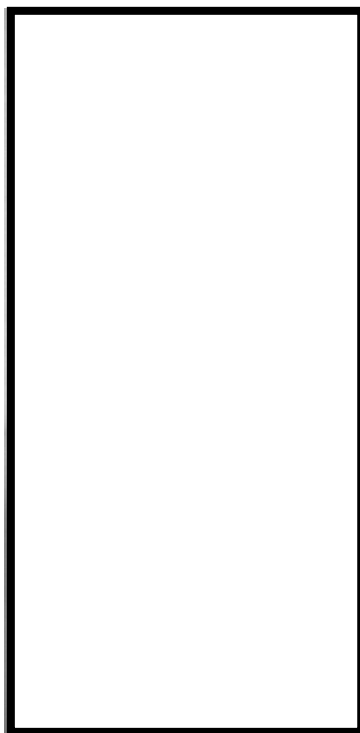


図5 高畑天満宮1（福島県）

1と似た特徴を有しているが、高畑天満宮1(図5)の木鷲は羽の形状が山形県米沢市の笹野一刀彫の職人が製作したと考えられるカーブを有し、七尾天神社(図7)の木鷲は正面に松竹梅の模様が描かれている。東北、関東、東海、関西など、東日本を中心に広範囲に分布し、太宰府の木鷲分類AとA'の特徴を有すA-1に似つつも、製作技法や彩色などに受容した地域独特の変化が見受けられる。

A-3は彩色は赤黒緑で、目は大きな逆三角目で口を切込や彩色で表現する。胸の彩色位置は上位に楕円もしくはやや円形に描く。羽は縦直列もしくはカーブに削り出す。頭頂部分は金紙張付や金泥塗布するものが多く、黒色に彩色するものもみられる。岩津天満宮(図8)、山田天満宮、高畑天満宮2(図9)、道明寺天満宮、菅原天満宮(図10)、網敷天満宮などが該当する。太宰府の木鷲分類で最古期の木鷲A・A'と、目の形状だけが昭和三十三年(一九五八)から現在まで製作される最新形態の木鷲C両方の特徴を有している。前述した『三養雜記』に、江戸時代後期の文政二年(一八一九)に大阪の天満天神(現在の大阪天満宮)に太宰府にならって、鷲替神事が始まり、大いにもてはやされたと記されていることから、太宰府の木鷲分類AとA'の特徴を持つ木鷲が関西に伝わっていたと考えられる。また、A-1が関東地域に多く見られるのに対し、A-3は関西・東海地域に分布が偏っている。目の形状だけが太宰府で最も新しい木鷲Cの特徴を取り入れているのは、関西・東海地域が関東に比べ地理的に近かったことから従来の形態に最新形態を組み合わせた独自の木鷲が出来上がったと推定される。

B-1は、彩色は赤黒緑で、目は大きな逆三角目で口を彩色により表現する。胸の彩色位置は上位に楕円もしくは円形で描く。羽はカー

○全国の木鷲A-3

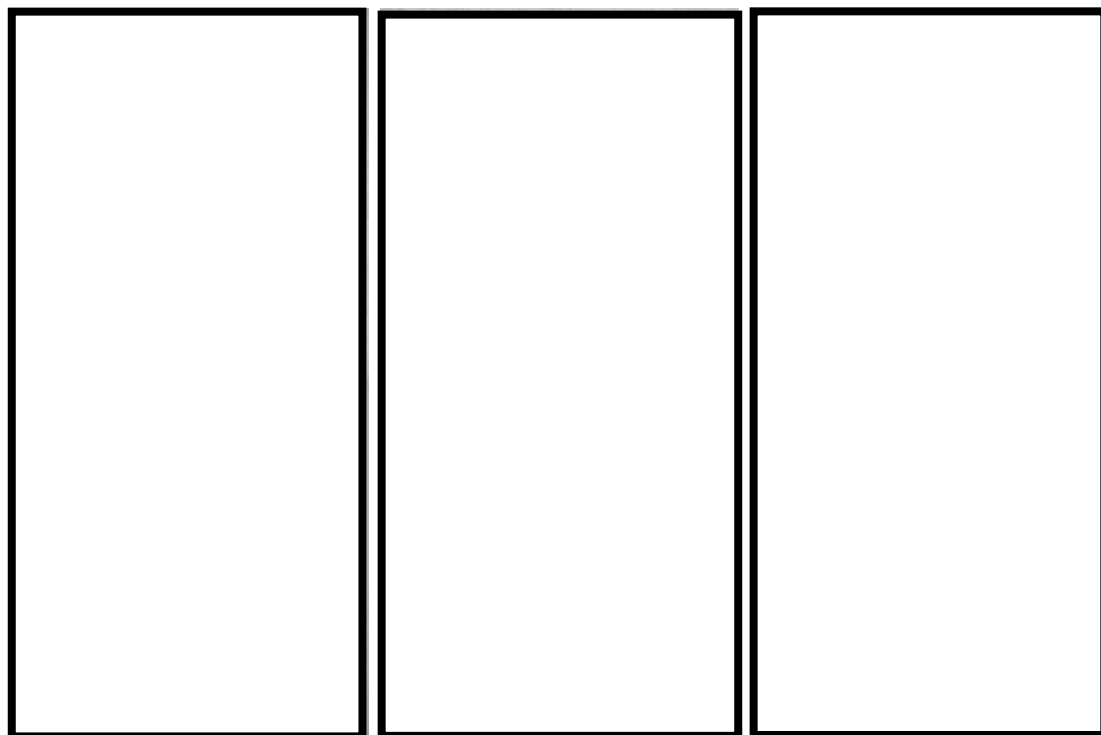


図10 菅原天満宮(奈良県)

図9 高畑天満宮2(福島県)

図8 岩津天満宮(愛知県)

○全国の木鷲B－1

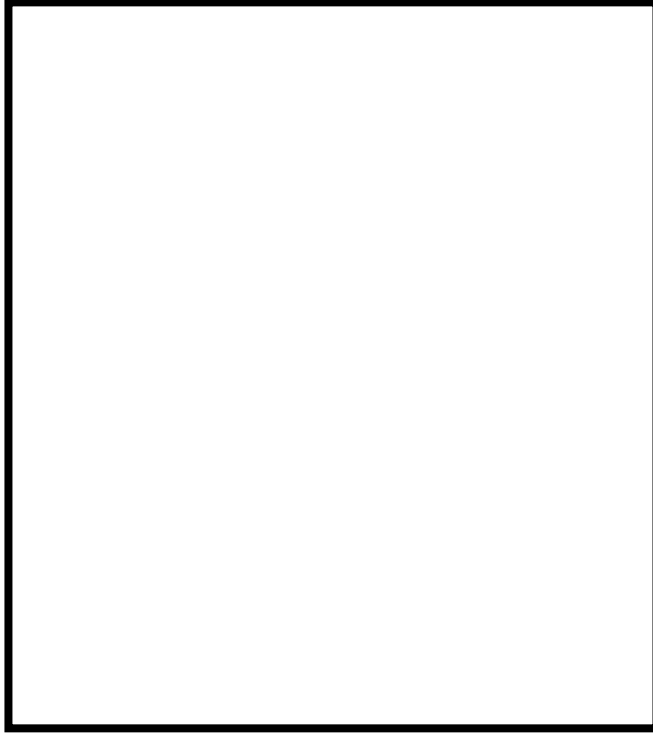


図11 北野天満宮（福岡県）

ルに削り出す。頭頂部分は金紙張付や金泥塗布する。太宰府天満宮、水鏡天満宮、住吉神社、老松神社、北野天満宮（図11）などが該当する。太宰府の木鷲分類Cに類似する。現在、太宰府で製作されている木鷲の形態である。昭和三十三年（一九五八）にベルギーのブリュッセル万国博覧会に「郷土玩具、紙製品その他」のグループの一つとして出展したことを契機に、生み出された木鷲がB－1である。福岡県下の地域に分布している。ただ、水鏡天満宮、住吉神社、老松神社など、以前は各地域に木鷲職人が存在し、独自の形態を持つ木鷲が製作されていた。現在は太宰府で製作を行っている。

B－2は、彩色は赤黒緑で、目は丸目もしくは逆三角目で、口は表

○全国の木鷲B－2

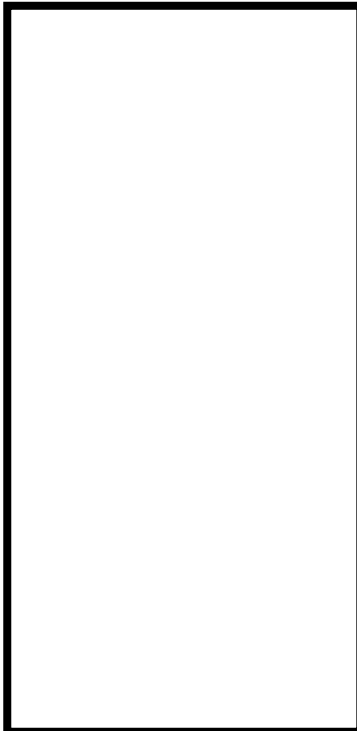


図14 駛馬天満宮（福岡県）

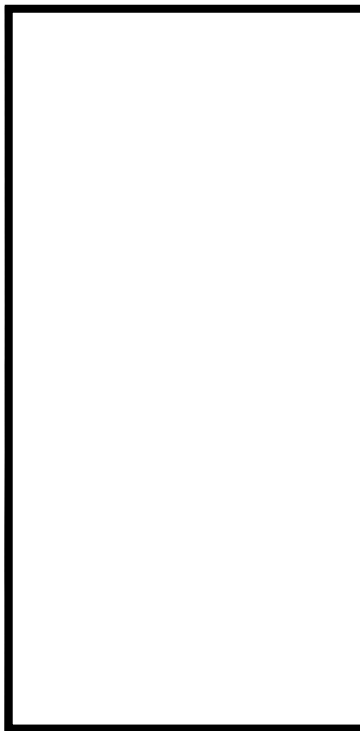


図13 滝宮天満宮（香川県）

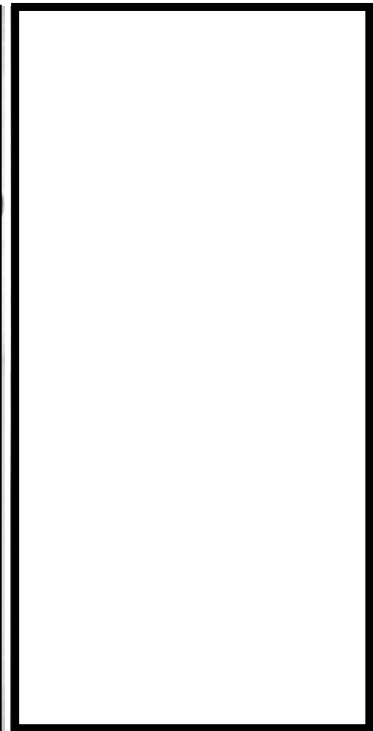


図12 上町天満宮（福岡県）

現しない。胸の彩色位置はほとんどが下位の切込部分を塗りつぶしている。羽は放射状やカール、カーブに削り出す。頭頂部分は赤や黄色に彩色したり、金紙張付する。上町天満宮（図12）、滝宮天満宮（図13）、登立天満宮、駛馬天満宮（図14）などが該当する。太宰府の木鸕分類BとB'に類似する。B・B'に分類した木鸕は一見共通性がないように見えるが、太宰府の木鸕分類Bの口を表現しないことと、B'の羽を描画しなくなる特徴を有している。太宰府の木鸕分類Bは明治後半から昭和初期までの時期で、目の形状や胸の彩色位置、羽の形状など多種多様な木鸕が製作され、羽の形状を描画とカールとを同時に作り込む特徴がある。それが、太宰府の木鸕分類Bになると口を彩色で表現するようになるが、羽の形状はカールのみで表現され、描画を施さなくなる特徴がある。つまり、B・B'はその両方の特徴を有し、明治から昭和三十年代以前までに太宰府から木鸕が伝わった地域だと考えられ、九州・四国地域に分布している。

Cは、赤のみの彩色で、目は黒点で表現する。口を表現しない。胸の彩色位置は下位の切込部分を塗りつぶす。角埋神社（図15）などが該当する。太宰府の木鸕分類に属性が類似するものはない。九州は“東のこけし、西のきじ車”と言われる伝統民芸品きじ車を製作してきた地域である。木鸕製作にきじ車を製作していた木地師が担当し、地域で培われてきた木工技術によって新たに生み出された九州独自の木鸕である。しかし、きじ車も木鸕同様に地域により様々な形態のものがかつては多く製作されていた。きじ車製作の傍ら、神事の際には木鸕製作を行っていたと思われるが、現在その両方を製作している所はなく、地域住民で木鸕を製作しているところが多い。廃絶した地域には、大分県北山田や豊後森などがある。

○全国の木鸕C

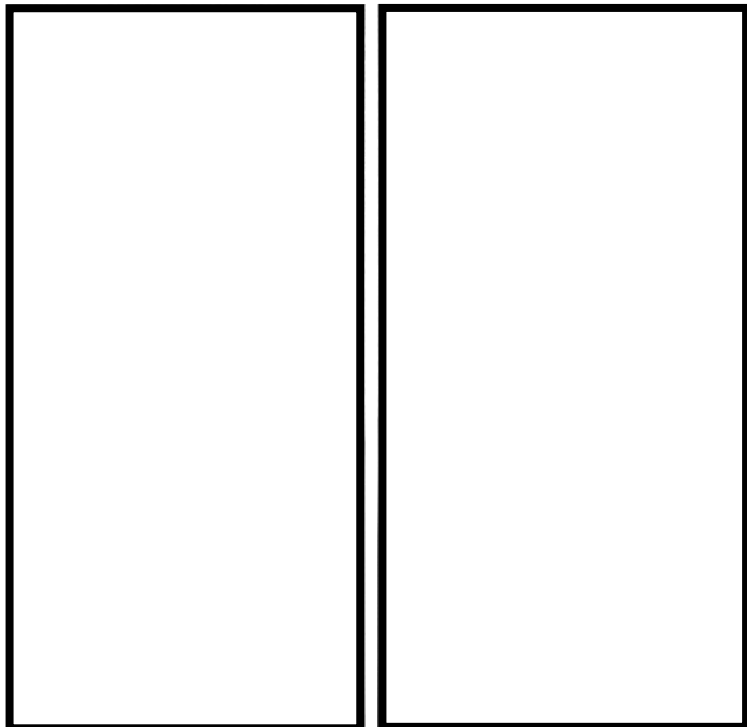


図15 角埋神社（大分県）

三 まとめ

分類結果を比較すると、全国の木鸕は6つのタイプに分類でき、太宰府の木鸕分類に対応していることが分かった（表4）。全国の木鸕A・B・Cは江戸時代に、A・B・Cは江戸時代と昭和三十三年以降に、B・B'は明治から昭和初期に、B・B'は昭和三十三年以降に、太宰府から木鸕が伝播もしくは影響したことが分かった。また、全国の木鸕は、タイプごとに太宰府の木鸕が伝播もしくは影響した時期が異なり、

この時期の違いが、現存する全国の木鷺が多様な様相となった要因の一つだと考えられる。

また、全国の木鷺はタイプごとに分布域に偏りがある。太宰府から地理的にも文化的にも縁辺地域にあたる東北や関東地域に太宰府では最古期の木鷺形態が、関西地域には太宰府では最古期と最新形態両方の特徴を持つ木鷺が、太宰府周辺地域では太宰府で最新形態の木鷺が分布している。この結果は太宰府の木鷺が四〇〇年近い歴史の中で、常に形態が変化し続けていたことを示している。これは太宰府の木鷺が伝承や文献、絵画資料だけではなく、全国の木鷺を分析することでも、鷺替神事と木鷺の発祥の地であることを証明しているのである。

しかし、ただ単に発祥の地から鷺替神事と木鷺が伝播した結果、このような偏りが生じたわけではない。それには現在各地域で行われている鷺替神事の方法にも要因がある。太宰府は四〇〇年近い歴史の中で、鷺替神事の祭日や催行方法に多少の違いはあれど、木鷺を替えあうという方法に変化はないが、同じ形態の木鷺を作り続けていたわけではない。時代を経るごとにその形は変化し続けてきた。変化し続けた原因は、鷺替神事の参詣者が、自身で木鷺を手作りしたり、調達したりする入手方法にある。太宰府天満宮の鷺替神事は自らが用意した木鷺を形代として、一年間ついでしまった嘘を移し、天満宮の境内地で替えあうことで嘘（穢れ）を払い、誠（幸運）もしくは金鷺（大幸運）を手にする災除開運の行事である。神事において、木鷺は祭具でありながら主役ではなく、目的はそれを替えあうことである。そのため、各自が用意する木鷺が、形や色を変えていくことをこだわりなく楽しんでいたのでないだろうか。『筑前太宰府鷺換追儼之図』や『筑州太宰府天満宮追儼并鷺替之図』（図16）には、鷺換神事当日にバン

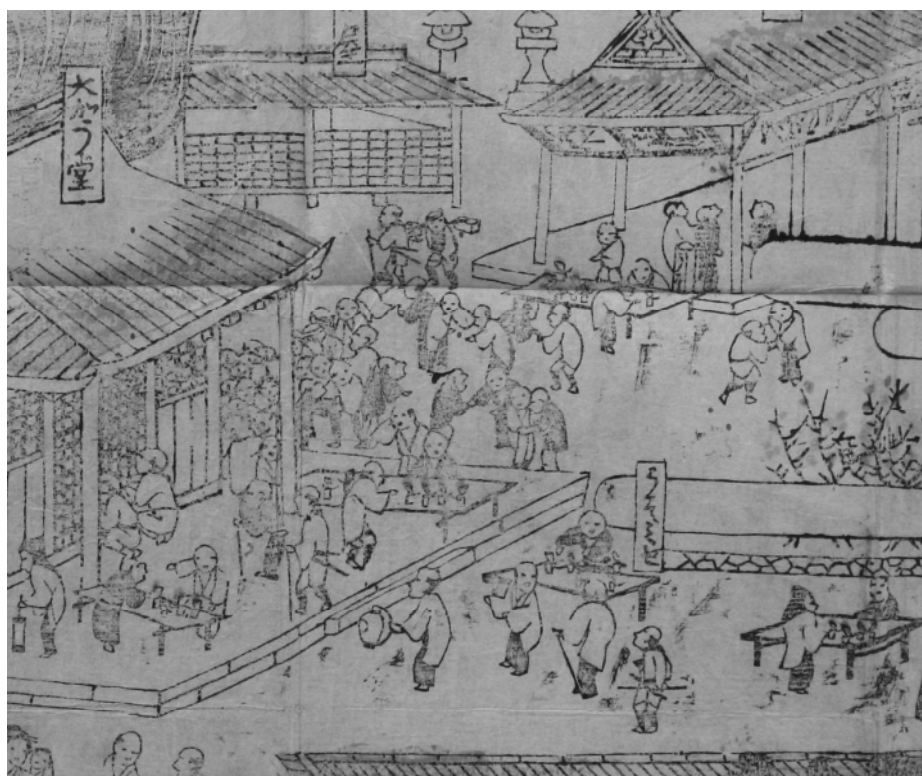


図16 『筑州太宰府天満宮追儼并鷺替之図』部分拡大 福岡市総合図書館蔵

コで仮設の販売所を作り、木鷺が販売されている江戸時代の様子が描かれている。これらの絵画資料により、販売者が複数あったこと、聞き取りによる戦前までの製作販売者が神社そのものでなく、周辺住民によるものであったこと、さらに個人で製作したものも使用されてい

表 3 全国の木鸕属性表

神社名	タイプ	彩色			目の形状		口の表現		胸の彩色位置		羽の形状					頭頂		備考
		赤黒緑金	赤黒緑	赤	丸目	逆三角目	くちばし	口の切込	上	下	描画・線刻	縦直列	放射状	カーブ	カール	彩色	金紙・金泥	
1 亀戸天神社	A	○			○			○	○			○				黒		図4
2 新井天神		○			○			○	○			○				黒		図3
3 潮江天満宮		○			○			○	○			○				黒		
4 谷保天満宮			○		○				△			○				黒		図6
5 高畑天満宮1			○		○				○				○			黒		図5
6 千葉天神			○		○				○		○					青		
7 上野天満宮			○		○				○			○					○	
8 七尾天神社			○		○				○							黒	印	図7
9 大阪天満宮			○		○点				○				○			黄		
10 高畑天満宮2			○			○			○			○				黒		図9
11 山田天満宮	3		○			○								○			○	
12 岩津天満宮			○			○金縁		○	○			○				黒	○	図8
13 道明寺天満宮			○			○金縁		○	○			○					○	
14 菅原天満宮			○			△		○	○		○						○	図10
15 綱敷天満宮			○			○		○	○				○			黄		
16 太宰府天満宮	1		○			○		○	○						○		○	
17 水鏡天満宮			○			○			○						○		○	
18 住吉神社			○			○		○	○						○		○	
19 老松神社			○			○		○	○						○		○	
20 羽野天満宮	B		○			○		○	○						○		○	
21 北野天満宮			○			○		○	○						○		○	図11
22 上町天満宮			○			○				○		○					○	図12
23 登立天満宮			○		○				○				○			赤黄		
24 滝宮天満宮	2		○		○					○					○変則			図13
25 駿馬天満宮				○	○					○					○変則	赤		図14
26 角埋神社	C			○	○点					○		○				赤		図15

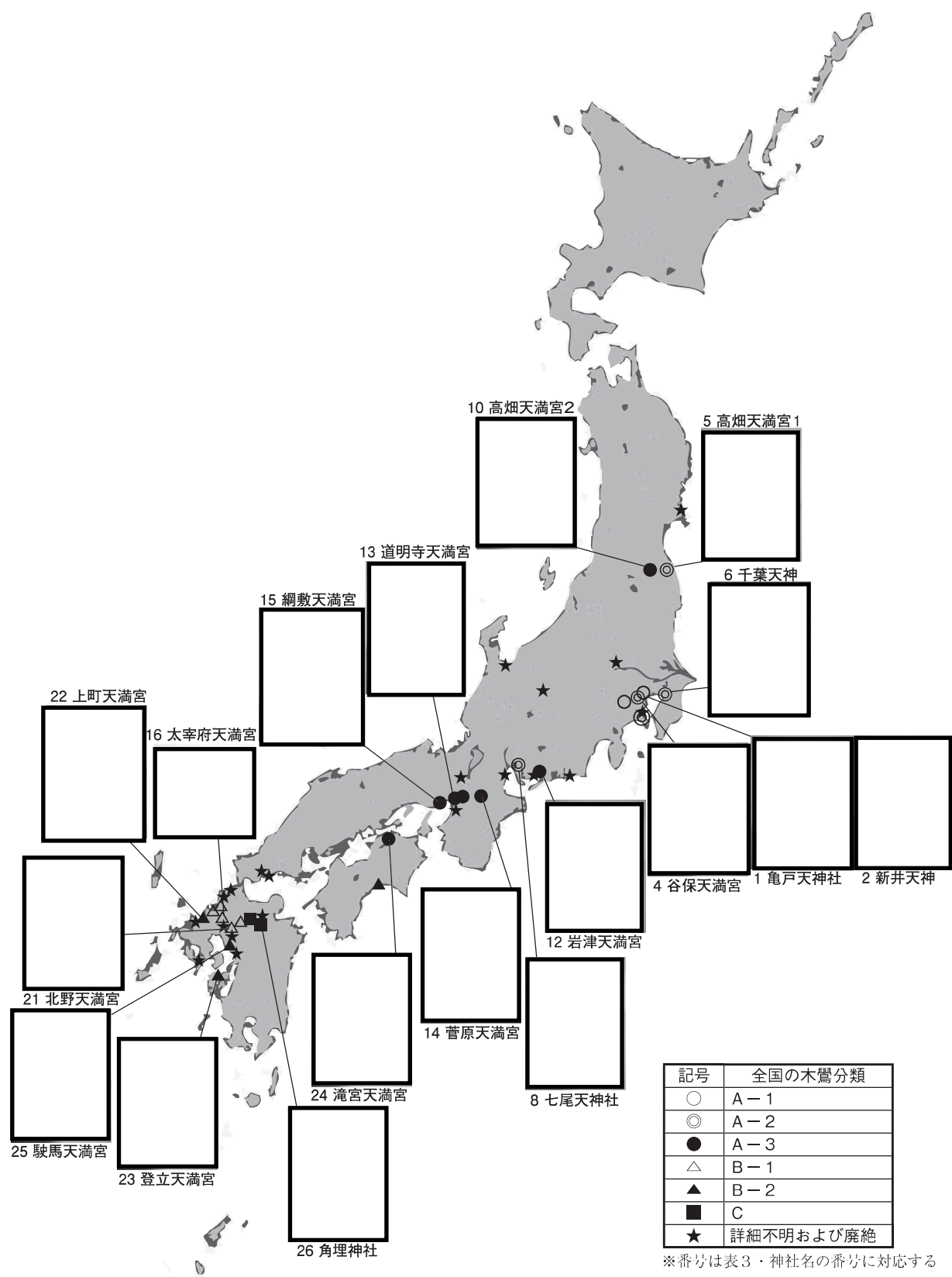


図17 木鷲分布図

表4 太宰府と全国の木鷺属性対照表

年代	太宰府の木鷺分類	全国の木鷺分類	該当神社名	分布地域
江戸時代初期～前期	A	A-1	亀戸天神社、新井天神、潮江天満宮、町田天満宮など	関東地域、四国
		A-2	谷保天満宮、高畑天満宮1、千葉天神、上野天満宮、七尾天神社、大阪天満宮など	東北、関東、東海、関西地域が多い
		A-3	高畑天満宮2、山田天満宮、岩津天満宮、道明寺天満宮、菅原天満宮、網敷天満宮など	東北、東海、関西地域
幕末頃	A'	A-3	高畑天満宮2、山田天満宮、岩津天満宮、道明寺天満宮、菅原天満宮、網敷天満宮など	東北、東海、関西地域
明治時代～昭和初期(戦前頃)	B	B-2	上町天満宮、登立天満宮、駛馬天満宮、滝宮天満宮など	四国、九州地域
昭和初期～平成始め頃	B'			
昭和33年～現在	C	A-3	高畑天満宮2、山田天満宮、岩津天満宮、道明寺天満宮、菅原天満宮、網敷天満宮など	東海、関西地域
		B-1	太宰府天満宮、水鏡天満宮、住吉神社、老松神社、羽野天満宮、北野天満宮など	九州（福岡県・大分県）
		C	角埋神社など	九州（大分県）

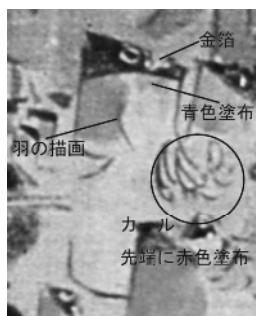
たことが分かっている。この点では太宰府での製品の生産と供給の体制は亀戸などのような神社側が一律に製作し授与する形態とは異なる形であったと言え、それゆえに型式変化を引き起こす余裕が太宰府にはあったと考えられる。また、そこには常に新たなデザインを創造する職人や文化人を要した太宰府の文化と経済力の高さが下支えしていたと考えられる。そのような宰府の文化的高揚が、江戸時代後期に太宰府から大阪の天満天神と江戸の亀戸天満宮に鷺替神事と木鷺が伝播するきっかけを生んだと推測される。大阪と江戸、両都市の中心的存在の天満宮を核として、神事や木鷺はさらに各地域に伝播していったと考えられる。ただ、神事と木鷺が受容されていく過程で、各地域が元来培ってきた習慣や製作技法などにより、祭日や神事の催行方法、木鷺の形態などが、太宰府とは異なる地域差となって現れている。祭日は関東・関西地域では年明けにもっとも参詣者が集まる初天神の一月二十五日に、九州地域では春季や秋季、夏祭りに合わせ神事を催行し続け、現在に至っている。また、関東地域では縁起物を年毎に小から大へと大きさの異なるものに交換していく俗習がある。木鷺も1年前に買った木鷺を納め、新しい木鷺を買い求めることを、総称して鷺替えといい、木鷺を交換し合っているところはほとんどない。木鷺は同じ形態のものを異なる大きさのものに交換していくことに意味があるため、形が変化してはならないのである。このことが、太宰府からもつとも遠方に位置する関東地域に太宰府では最古期の木鷺の形態が作られ続けた理由のひとつではないだろうか。

ここまで、全国の木鷺は太宰府の木鷺が伝播あるいは影響をし、多様化する様相になったことを明らかにしてきた。しかし、多様化した木鷺は、ただ単に鷺替神事と木鷺という太宰府発祥の文化が浸透した

結果というだけではなく、各地域が培ってきた文化により変容し伝承されてきたものでもある。今回、分類した木鷲は現存するものに限っているが、かつてはもっと多種多様な木鷲が存在していた。各地で親しまれていた木鷲は、後継者不足や原木の減少、神事の廃絶などにより減少の一途を辿っている。この論文をまとめることにより、歴史ある鷲替神事と木鷲を見直し、後世に伝承されていく一路となればと願っている。

註

- (1) 「天満宮御一代記・絵本菅原実記」太宰府天満宮蔵
- (2) 尾崎雅嘉『百人一首一夕話（上）』二一六頁 一九七三年 岩波書店
- (3) 柳智子「太宰府の木鷲」『年報太宰府学 第四号』二〇一〇年
- (4) 前掲註(3)参照。
- (5) 川崎巨泉『巨泉玩具帖』一九一九～一九三三年 大阪府立中之島図書館蔵、川崎巨泉『玩具帖』一九三二～一九四二年 大阪府立中之島図書館蔵を参照して復元を試みた。
- (6) 前掲註(3)参照。
- (7) 万治年中と伝えられる「宇曾替之守之図」は、『天満宮御一代記・絵本菅原実記』に年代の記述はなく、年代の記述があるのは、天保四年（一八三三）の『百人一首一夕話』である。万治年中と同時期の文献に記載されているわけではないため、あくまで伝承として捉えておく必要がある。
- (8) 前掲註(3)参照。
- (9)



- (10) 個々の神社の木鷲は年代により形態に変化が見られるため、分析する資料が煩雑化すること避けるために、現存する木鷲のみを分類対象とした。

- (11) 齋藤秋圃『筑前太宰府鷲換追離之図』一八五三年 福岡市博物館蔵

参考文献

- 川崎巨泉著画『おもちゃ畫譜』一九三二年 村田書店
 古川誠一『九州の郷土玩具』一九八二年 思文閣出版
 山田徳兵衛編『日本の郷土玩具』一九六七年 鹿島出版会
 武井武雄『日本郷土玩具』一九三四年 金星堂
 堤忠二郎『福岡の郷土玩具』一九七三年 福岡民報社

〔付記〕本稿を全国の郷土玩具蒐集家で研究を精力的に続けられた故・秋吉元氏に捧げます。秋吉元氏は「これからも木鷲研究頑張ってください」と全国の木鷲コレクションの一部を譲渡していただき、郷土玩具の魅力と研究の面白さを語ってくださいました。記して、感謝申し上げます。その他、多くの方々にご援助やご教示、ご協力を賜り、以下に記して感謝の意を表します。

青柳健夫、石垣悟、占部史子、大倉茂人、大阪府立中之島図書館、岡藤一彦、岡藤澄代、木村當馬、島津屋幸子、高田京子、太宰府木うそ保存会、西田早織、藤田英雄、森弘子、八尋千世、八尋千奈美、山村信榮、吉田幸一、緑水庵高山真弓（五十音順敬称略）

（やなぎ・ともこ 太宰府木うそ保存会理事）